

平成27年度スーパーグローバルハイスクール構想調書の概要

指定期間	ふりがな	あおやまがくいんこうとうぶ				②所在都道府県	① 東京都
27～31	① 学校名	青山学院高等部					
③対象学科名	④対象とする生徒数					⑤学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	全日制普通科高校。1学年約410人。全体で1230人。男女比はほぼ同数だが、女子が3～4%上回る。	
普通科	417	403	406		1226		
⑥研究開発構想名	多様性の受容を基盤とした「サーバントマインド」を持つグローバル・リーダー育成						
⑦研究開発の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・海外提携校と共同で多様性の受容、貧困格差等の問題に対し、設定した課題を研究する。 ・2020年東京オリンピック・パラリンピックに対応できる、高度な英語力と深い文化への理解、他に資する精神に富む、東京アテンド・ボランティアリーダーを育成する。 ・高大連携の枠組みを用い、世界各地から集まる留学生との多言語セッション、フォーラムを通し、大学在学中に世界各地に長期留学を行う人材を育てる。 						
⑧研究開発の内容等	⑧-1全体	<p>(1) 目的・目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・異なる文化社会的背景を擁する同世代と積極的に意思疎通を行い、多様性を当然のことと考え、お互いの長所を認識しながら発信受信できる生徒を育てる。 ・また、共に形成した集団が問題を認識しそれを共有して、解決までのプロセスを進む際のリーダーシップを取れる人材を育成していく。 ・高大連携を一層強化し、大学在学時に協定を結ぶ世界各地の大学への留学生数を現在の年間50名（半数は短期留学）を80名に押し上げることを目指す。 <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 短期交換留学のパートナーとして海外3校と姉妹校提携を結んでいる。それぞれの学校と共同で取り組むプロジェクトを用意することで、思考や取り組み過程に多様性を見出し、積極的に受容する姿勢が生み出される。この中には2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピックの際、ボランティアガイドを取りまとめることができるリーダーの育成も含まれている。イートン校との交流の際に、2年にわたり行った実績を持つこのプログラムを他の2校との交流にも用いることで、より多くの生徒が関わるができるようにする。 2. 学院全体で取り組んでいるフィリピン訪問プログラムや震災の被災地にある宮古高校との交流を通して、「共にいる」ことから育む同朋意識を基に、社会の歪みや災害の問題を共に考える機会を提供してきた。今後はこの活動に生徒の自主団体が接点を持つことで、さらなる活動の広がりが期待できる。 3. 高大連携に関しては、教授陣の本校生徒への学問入門講座の開講、大学への留学生をリーダーとする会話セッション、チャットルームの開催などですでに実績がある。さらに国際政治経済学部や地球社会共生学部のスタッフがアドバイザーとして国際化、グローバル化の視点からそれぞれシンポジウムへの招待や、アジア諸国からの留学生との共同フォーラムの定期開催でさらにつながりを強めていく。これにより欧米はもちろん、それ以外の地域への関心が高まり、世界各地に留学する学生が増えることが期待される。 <p>(3) 成果の普及</p> <p>学院全体の定期刊行誌「青山学報」、本校教員の「研究紀要」、月報「高等部だより」で紹介していく。また、日々の礼拝を通しての体験の共有や文化祭での展示発表という形で行っていく。隔年、大学協定校からの留学生、本校卒業生を中心とした発表フォーラムを行う。</p>					

<p>⑧ -2 課 題 研 究</p>	<p>(1) 課題研究内容 課題研究テーマ：①多様性の受容 ②社会的弱者に対する認識の拡充と関係の構築 1. 日英合同の高校生によるグローバル問題の認識と共有。多様性を受容することの重要さの認識と共有。「フェアトレード」問題共同討議の取り組み。その運営法と成果の検討。 2. 東京アテンド・ボランティアとそれを取りまとめるリーダーの育成の方策。 3. 「フィリピン訪問プログラム」震災被災地の高校、県立宮古高校、宮古来たとの交流プログラムによる「他者に寄り添う心」の育成の過程とその検討。 4. 高大連携による世界各地から青学大への留学生との出会いが、大学に進学したのち協定する大学へ留学する生徒の人数にどのような影響を及ぼすかを調査。</p> <p>(2) 実施方法 1. 初年度、アジア諸国の留学生と討論形式のキャンプを開催する。2年目、提携校・英国リーススクール生10名、本校生20名が郊外施設で宿泊しながらグローバル問題の討議を行い、生徒の自主団体「ブルーベコ」の協力も得ながら、3年目には共同で「フェアトレード」の現地調査、研究発表を行う。 2. 海外提携校からの短期訪問を受けた際、1校の訪問につき30名の都内アテンドチームを作る。そのチームに対して英語科ネイティブ教員がアテンド係養成セッションを組む。 3. 「フィリピン訪問プログラム」に参加する初等部から短大までの年齢の違う参加者がお互いにどのような影響を与え合うかを検証する。宮古高校とのつながりを継続し、参加者中心のフォーラムを開催して、双方向の学び合いの場を作る。 4. 大学への留学生の開く多言語会話セッションとアジア諸国の学生とITを使って行うフォーラムを定期的実施する。5年後には大学の協定校長期留学に参加する人数を現在の倍の50名に押し上げる。(地域も米英外に押し広げる。)都心に位置する土地の利を活用した「大使館レクチャーシリーズ」を大学国際交流センターの全面的な支援により実施する。</p> <p>検証評価 1に関しては活動記録を機関紙として発行。2,3に関してはSGHプログラム専用のポータルで行う、定期的に意識調査を回収・集計する。1,2,3を通しての生徒の成長過程のサマリーは個人がポータルの「平和共生ログブックのページ」を完成し提出した際に評価を行う。4については大学国際交流センターから報告される留学者数で検証を行う。</p>
<p>⑧ -3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 * 青山学院英語教育センターが独自に開発した初等部から高等部まで使用する一貫制英語テキスト“Seed Book Series”12巻ではぐくむ英語運用能力:検証は各学年開始時に実施するTOEICを用いる。(1年はTOEIC Bridge) * 海外初心者に国際社会参加を促す本校のカナダホームステイ:検証は、SGHポータルへの生徒のフィードバック、実施後の感想文、その後留学に取り組む生徒、卒業生の人数調査に基づいて行う。</p> <p>(2) 課題研究の実施以外で必要となる教育課程の特例等 なし</p> <p>(3) グローバル・リーダー育成に関する環境整備, 教育課程課外の実組内容・実施方法 * ICT委員会による電子黒板、タブレット端末等ITツールを駆使した授業。生徒のアイデアを生かす発信型、双方向の授業展開の導入で、知識の定着と思考力の向上を目指す。 * 生徒個人に配布する青学SGHポータルを通し、イベントの告知、参加申し込み、資料配布、意見交換、フィードバックから、リーダーシップ、サーバントマインドの成長を追跡する意識調査までを速やかに行えるようにする。</p>
<p>⑨その他 特記事項</p>	<p>* 幼稚園から大学院までをワン・キャンパスに擁する環境を最大限に利用する。初等部、中等部との連携。高大7年スパンの中で、自分の目的や成長に合った時期に長期留学ができるよう、アドヴァイスするシステムを強化する。 * 国際政治経済学部、地球社会共生学部の教授陣より、高校生個人々々人に向けての適切なアドヴァイスを得られるシステムをSGHポータルに組み入れていく。</p>

ふりがな	あおやまがくいんこうとうぶ	指定期間	27～31
学校名	青山学院高等部		

平成27年度スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）								
	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(31年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:							70人
	SGH対象生徒以外:		50人	50人				
目標設定の考え方: 既に多数の生徒がボランティア活動等に参加している現状がある。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:							150人
	SGH対象生徒以外:		80人	80人				
目標設定の考え方: 毎年行われる本校プログラムは自主参加であり、その参加は約50人、自主的に1年の留学に出る生徒は20名である								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:							70%
	SGH対象生徒以外:		50%	50%				
目標設定の考え方: 全校生徒に対する現時点のアンケートの数値から判断するとこのようになる。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:							5人
	SGH対象生徒以外:		2人	2人				
目標設定の考え方: 現状では少人数の参加者のみで、急に数が増えることは予想できない。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
e	SGH対象生徒:							28%
	SGH対象生徒以外:		18%	18%				%
目標設定の考え方: 現時点での全校生徒に対して行われるTOEICの結果からこの数値が設定される。								
(その他本構想における取組の達成目標)								
f	SGH対象生徒:							
	SGH対象生徒以外:							
目標設定の考え方:								

1' 指定4年目以降に検証する成果目標								
	25年度	26年度	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	目標値(34年度)
国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合								
a	SGH対象生徒:							90%
	SGH対象生徒以外:		85%	85%				
目標設定の考え方: 青山学院大学は国際色の強い大学であり、そこに8割が進学し、更に他大学の国際色の強い大学に多数進学している。								
海外大学へ進学する生徒の人数								
b	SGH対象生徒:							5人
	SGH対象生徒以外:		2人	2人				
目標設定の考え方: 内部進学制度をとっているため、海外大学への進学は限られる。								
SGHでの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合								
c	SGH対象生徒:							50%
	SGH対象生徒以外:		-	-				
目標設定の考え方: 海外を志向して入学してくる生徒が多いので、急に志向が変わることはない。								
大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数								
d	SGH対象生徒:							80人
	SGH対象生徒以外:		-	-	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現状から判断するとこのようになる。								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	目標値(31年度)
a	課題研究に関する国外の研修参加者数							
	16人	16人						30人
	目標設定の考え方：現状から推移と企画プログラムの内容による。							
b	課題研究に関する国内の研修参加者数							
	130人	100人						180人
	目標設定の考え方：岩手県立宮古高校との交流及び都内アテンドプログラム参加者(増加予定)。							
c	課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数							
	3校	3校						7校
	目標設定の考え方：現在の3校に加え、大学が提携する海外の大学及びアジアの高校との連携を行う予定。							
d	課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	60人	60人						80人
	目標設定の考え方：青山学院チャットルーム担当の学生数および交流を行う予定のアジアからの留学生数。							
e	課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)							
	8人	8人						12人
f	グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数							
	2人	2人						3人
	目標設定の考え方：現状からの考えての予想数。							
g	帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)							
	80人	90人						95人
	目標設定の考え方：帰国生、長期、短期留学生数の統計。							
h	先進校としての研究発表回数							
	0回	0回						1回
	目標設定の考え方：World Aimsに関する研究発表を現地視察後実施予定							
i	外国語によるホームページの整備状況 ○整備されている △一部整備されている ×整備されていない							
	△	△						○
	目標設定の考え方：現状で一部展開しているものを更新して整備して行く。							
j	(その他本構想における取組の具体的指標)							
	目標設定の考え方：							

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度
全校生徒数(人)	1,251	1,240	1,240				
SGH対象生徒数			1240				
SGH対象外生徒数							